

中学生の「居場所のなさ」に関する研究

清水 寛子

〔抄 録〕

近年、「居場所がない」という言葉が日常語として聞かれるようになった。その一方、これまで「居場所感」がどのような背景で高まり、どのような要因で「居場所がない」といった感覚を持つのかについては明らかにされていない。「居場所のなさ」を訴える児童が増加し、「居場所」の必要性が指摘されるなかで「居場所がない」とはどういう事を改めて考える必要があると思われる。そこで、本研究では現在「居場所がない」と感じている中学生と中学時代「居場所がない」と感じていた大学生を対象に半構造化面接を行い、「中学生の居場所のなさ」とは一体何か、その規定因及び影響について探索的に調査した。その結果、「居場所がない」ことが個人にとって危機的状況であることは否定できるものではなかったが、「居場所がない」ことの背景には自己成長の芽が秘められており、個人がどのように「自分」と向き合い付き合っていくかによって変化する事が示唆された。

キーワード：居場所、中学生、思春期、不登校

問題・目的

1. 「居場所」の定義

近年、「居場所がない」という言葉が日常的に聞かれるようになった。その背景には、1980年代に不登校問題が取り上げられ、学校に「居場所」のない子ども達のための「居場所」として誕生したフリースクールが起源といわれている（住田，2003）。つまり、「居場所」という概念は、不登校問題を期に「居場所」のない子どもに「居場所」を作るという動きの中で広まったといえる。しかし筆者自身、「居場所がない」と語る個々人に耳を傾けていると、その言葉には実に様々な背景が包括されていると感じる。つまり、「居場所がない」と語られるその「居場所」という言葉には、実に多くの問題の在り方を示唆しているのではないだろうか。

そもそも、「居場所」とは一体どのような意味を持つ概念として捉えられているのだろうか。中島・廣出・小長井（2007）によると、「居場所」という言葉は、2000年以前発行の辞書では、

物理的な側面を指す「いどころ・座る場所」とあるが、2000年以降発行の辞書には「身を落ち着ける場所」などの心理的側面が加えられていることを指摘している。竹森（1999）は日本語の「在る」と「居る」の違いに触れ、「在る」が実存や存在そのものを表現するものであるのに対し、『居る』は、生きた人間の生活の周辺にあり、日常生活そのものと、そこに存在することが許容されることにある、住む場との関係性、つまり人と場の相補的關係性を内包する言葉である」としている。つまり、日常的に用いられる「居場所」という言葉には、この物理的な「居場所」に感情や感覚、意識や関係性など様々な心理的な意味が付加されていることが伺える。さらに「居場所」を英訳すると、“place” “space” などがあるが、いずれも物理的な場所を指し示し、物理的側面に加え、心理的側面を含んだ言葉が無いことが分かる。その為、Ciniiで「居場所」というキーワードを検索をすると、「居場所」という言葉は英訳されず“ibasyo”と表記されている。つまり日常語として使用される「居場所」という言葉には、日本人独特の感覚が付加されていることも推察される。

「居場所」について、北山（1993）は「居場所」を「自らの分」として、自分が「いること」の基盤には、外的な環境の中に「自分が自分でいるための環境」つまり、「自らの分」を得た状態があると示している。荻原（1997）もまた、「自分」「私」という観点から、『居場所』とは『私』とひと・もの・こととの相互規定的な意味と価値と方向の生成によってもたらされる『私』という位置である」と論じている。このように「居場所」は社会的位置づけによって捉えられている。また、文部省（現：文科省、1992）が出した「心の居場所」に関する報告を皮切りに、「居場所」の定義について多くの論考がなされてきた。しかし、「大半の居場所研究には定義が研究者ごとに異なりコンセンサスが得られていない現状が記されている。これは『居場所』そのものが多層的であり、一方向からの定義では集約できない難しさがある」（川島、2010）と指摘されるように、未だに「居場所」という概念は、一般用語としても、また研究の面においても、明確な定義は定まっていないのが現状である。しかし一方で、石本（2009）は、先行研究で使用される「居場所」の定義について「居場所が『ありのままでいられる』ことと『役にたっていると思える』ことの2つのキーワードで語られることが多い」と言及しており、「居場所」について一定の共通理解がなされつつあることが伺われる。

2. 「居場所」に関する先行研究

「居場所」に関する研究は大きく2つに分けられる。第一に、『居場所』とは何かについて、その内容や具体的な「居場所」、その感覚、心理的機能を検討し分類化を行うものである（杉本・庄司、2006a など）。第二に、学校適応や抑うつ、アイデンティティなどに関連付け、「居場所」が個人にどのように関係しているかを調査した実証研究が挙げられる（杉本・庄司、2006b；則定、2006b など）。これらはいずれも「居場所」の有無が学校不適応感や抑うつ傾向、アイデンティティ拡散と関連し、「居場所がない」という感覚が個人にとって危機的な状況である

ことを示唆してきた。

3. 「居場所」のなさ

ところで、「居場所がない」とは一体何を意味しているのだろうか。これまでの先行研究では、「居場所とは何か」を調べることが「居場所があるとは何か」を調べることとイコールになる傾向があり、「居場所がある」という点に焦点が当てられてきた。しかし、「居場所」感覚について、『居場所』という言葉は不思議な性質を持ち、『居場所』がないという否定的な意味の方が実感的に明瞭であり、そこを出発点として『居場所』を考える」(小川, 2007)、「『居場所』とは何かという定義は、彼らの居場所喪失経験から照らし出されてくる」(荻原, 1997)と論じられているように、「居場所」の感覚は、「居場所がない」という体験をもとに生起するものであることが推測される。このことから、「居場所」を研究するにあたり「居場所のなさ」に焦点をあて、研究することに大きな意味があると考えられる。

「居場所のなさ」について言及した先行研究には、青年期(大学生)を対象とした「居場所がない」感覚を検討したもの(堤, 2002; 正嵩, 2007)と、「居場所がある」状況と「居場所がない」状況とを「時」「人」「行為」「感情」「他者」の諸観点から比較検討したもの(中村, 1999; 則定, 2006a)があげられる。それらの研究は、「居場所」がない時、自己と他者が心理的・物理的に切り離された状態での反応が多いこと(堤, 2002)、「居場所」がない感覚は、周囲の人との関係や、個人の否定的感情の抱きやすさなど、様々な要因が絡み合って感じられること(中村, 1999; 則定, 2006; 正嵩, 2007)を明らかにした。これらは「居場所がない」ことについて言及した数少ない研究である。しかし、対象者が「居場所がない」と感じているかどうかの区別はなされていないこと、「居場所」が研究者によって操作的に定義されていること等の方法に問題が多くみられ、「居場所のなさ」についての見解としては十分ではない。また、これらはいずれも「居場所のなさ」の感覚に焦点を当てたものであり、「居場所のなさ」の感覚が個人にとってどのような意味を持ち、どのような要因によって生起されているのかといった研究はなされていないのが現状である。

また、北山(1993)は、「子どもという場所から出発して大人へと移動する期間で、急激に居場所が失われることがある」と思春期における危機について述べている。しかし、その一方で思春期を対象とした「居場所のなさ」について研究したものは殆ど見当たらない。また、もともと「居場所」という用語が不登校問題から来ているように、安定した対人関係である親子関係中心の児童期から、友人関係など広がりを見せる思春期に移行するにあたり「居場所のなさ」が多くみられるようになると考えられ、「居場所」研究において、思春期にあたる中学生に焦点をあてることに意味があると思われる。

4. 「居場所」研究の問題

以上を踏まえ、これまでの「居場所」研究の問題点をまとめると以下の3点があげられる。

1) 「居場所」研究的方法的限界

先行研究では主に「居場所がある」感覚や場所に関する質問紙調査が主流であった。しかし、石本（2009）は、「居場所」という言葉は明確な定義づけがなされずに用いられている言葉であり、「一般的に心理的な意味をも含め用いられているとはいえ、いざ居場所の内容を問われると意味が明白である物理的な空間を挙げるが多くなる」と指摘している。つまり、「居場所」という曖昧なものについて回答する際、「場所」や「人」といった知覚的に認知されやすい形で挙げられやすく、その背後にある複雑な要因や要素については捉えられにくいという問題がある。

2) 「居場所」の操作的な定義化

「居場所」の共通見解として、「居場所」は物理的にも心理的にも様々な意味を内包した言葉であり、個人によって「居場所」の捉え方が異なるとされている。さらに、中村（1999）は、「どんな場所が居場所の感覚を想起させやすいかという傾向はあっても、居場所の要素には、居場所感覚に影響を与えるような特徴はあまりない」と指摘している。また、荻原（1997）はその「場」が「居場所」になるか否かは、あくまで個人の側にゆだねられるという点を強調し、「居場所はつねに流動する可能性をもっている」ため、他人が用意した「場」を「居場所」にするとは限らないと指摘した。それにもかかわらず、先行研究では、研究者側が「居場所」の操作的定義を必要とし、その「居場所」は、具体的な「場所」や「人」などと限定される場合が多く、非現実的なものや、その背景にある要因は除外されてきた。このことから、研究者側が一方的に「居場所」を提示するのではなく、「居場所」を多面的、多層的に捉えたアプローチが必要であると考えられる。

3) 「居場所」が「ある」と「ない」について

これまで「居場所」に関して様々な研究がされてきたにも関わらず、それらの大半は『「居場所がある」とは何か』を問い、事例研究を除いては、実際に「居場所がない」と感じている個人には焦点が当てられてこなかった。例えば、「居場所がある」感覚の低い者が「居場所がない」と見なされたり、「居場所のなさ」に関する研究においても、「居場所のなさ」を体験している人の体験を基にしていない。石本（2009）は「居場所」における、一定の共通理解を明確にした上で、「居場所感がどのような背景で高まるのか、もしくはどのような要因で『居場所がない』といった感覚をもつようになるのかについては明らかにされておらず、介入ポイントを示すには至っていない」と指摘している。したがって、改めて「居場所のなさ」について考え直すことの必要性があると思われる。

以上を踏まえた上で、本研究では、現在「居場所」の問題に直面している中学生に焦点を当て、中学生の「居場所のなさ」とは一体何か、その規定因及び影響を調査することを目的とす

る。「居場所」という曖昧な概念を多面的に捉える為にも、面接調査によって「居場所のなさ」の本質を捉えることが望ましいと考える。しかし、発達段階から、中学生が自己を対象化し語ることの難しさを考慮し、それを経てきた大学生の語りと合わせて検討することで、より多面的・多層的に捉える必要があると考える。また、本研究が「居場所がない」と訴える多くの児童・生徒への介入の糸口になるような研究にしたいと考えている。

方法

1. 研究協力者

2010年9月、I県にある公立中学校の1年生（平均12.6歳）の男子109名、女子114名、J県にある大学で臨床心理学を専攻する大学1回生及び大学院生（平均20.0歳）の男性29名、女性43名を対象に、事前に「中学生の『居場所』に関するアンケート」¹⁾にて研究協力を募った。その後、研究に協力の意志を示し、アンケートにて“現在「居場所がない」と感じている”と回答した中学生（3名該当）及び、研究協力の意志を示し、“中学生の頃「居場所がない」と感じていた”と回答した大学生・大学院生（14名該当。その中から「居場所のなさ」の自由記述を参考に偏りが出ないように、筆者が4名に研究協力を依頼）を対象とした（表1）。

表1 研究協力者プロフィール

仮名	性別	年齢	職業
A	男	12歳	中学生
B	女	13歳	中学生
C	男	13歳	中学生
d	男	23歳	大学院生
e	女	22歳	大学生
f	男	22歳	大学院生
g	女	18歳	大学生

2. データ収集方法

本研究は2010年10月、中学校の保健室に隣接する個室及び、大学の心理相談室として使用されている部屋を利用し、個別法で行った。面接開始にあたって、研究協力者には研究の目的、方法、倫理的配慮について説明し、合意を得た上で実施した。また、協力者からICレコーダー使用の了承を得て面接内容を記録し、1人1時間程度で、半構造化面接によってデータを収集した²⁾。

表2 半構造化された質問項目

<ul style="list-style-type: none"> ・「居場所がない」と感じている（いた）のはどのような時ですか。 ・「居場所がない」と感じている（いた）時はどのような気持ちですか。 ・「居場所がない」と感じるその状況以外の場面では、「居場所のなさ」の感覚はどうなりますか。 <p>※「居場所がない」という感覚は現在どうなりましたか。</p> <p>→現在は「居場所がない」と感じなくなったと答えた場合</p> <p>※「居場所がない」と感じなくなったのはいつ頃ですか。</p> <p>※「居場所がない」と感じなくなる過程でどのような変化がありましたか。</p> <p>※「居場所がない」と感じている事と感じない事の大きな違いは何だと思われますか。</p> <p>・最後に、改めてあなたにとって「居場所がない」とはどのような意味だと思われますか。</p> <p>（※は大学生・大学院生のみに質問した項目）</p>
--

3. 分析方法

面接での発言内容から逐語録を作成した。グラウンデッドセオリーアプローチを参考に、研究協力者それぞれの発言内容を要点ごとに区切った。こうして得られたものをサブカテゴリーとして、内容が類似するサブカテゴリーをまとめ、カテゴリーを作成し命名した。さらにカテゴリーをまとめ、大カテゴリーを作成し命名した。以上によって、大カテゴリー及び各カテゴリー間の関係を図式化した。

結果と考察

データから得られたサブカテゴリーを〈 〉、サブカテゴリーを内容ごとにまとめたカテゴリーを《 》、それらカテゴリーを整理しまとめた大カテゴリーを【 】で示す。また、研究協力者の語りを『 』で示し、() は補足、[] はどの研究協力者の語りであるか示している。

1. 中学生が語る「居場所のなさ」

3名の中学1年生が語る「現在の『居場所のなさ』」についての分析の結果、【その“場”で感じる「居場所のなさ」感】【“場”の力・影響】【内的葛藤】【思春期的心性】という4つの大カテゴリーが導き出された。カテゴリー数は8、サブカテゴリーは数は25である（図1）

1-1 その“場”で感じる「居場所のなさ」感

「居場所のなさ」の感覚として、【その“場”で感じる「居場所のなさ」感】が見出された。これは《ズレの感覚》と《ネガティブな感情》の2つのカテゴリーから構成される（図1）。

《ズレの感覚》の内容の〈自分と他者のズレを意識すること〉とは、『かなり神経過剰みたいな感じで。周りからの目をかなり気にするんで [A]』といった、同じ空間にいる他者に対して感じるズレの意識である。また、〈自分とグループのズレを意識すること〉とは『周りの子はみんなグループだけど、この人だけ一人 [B]』といった同じ空間内に居るが、そこに形成された「グループ」に自分が属しておらず、その「グループ」に対して感じるズレの感覚を示している。また、中学生は自分がその“場”に属しているかどうか、外れているかどうか語

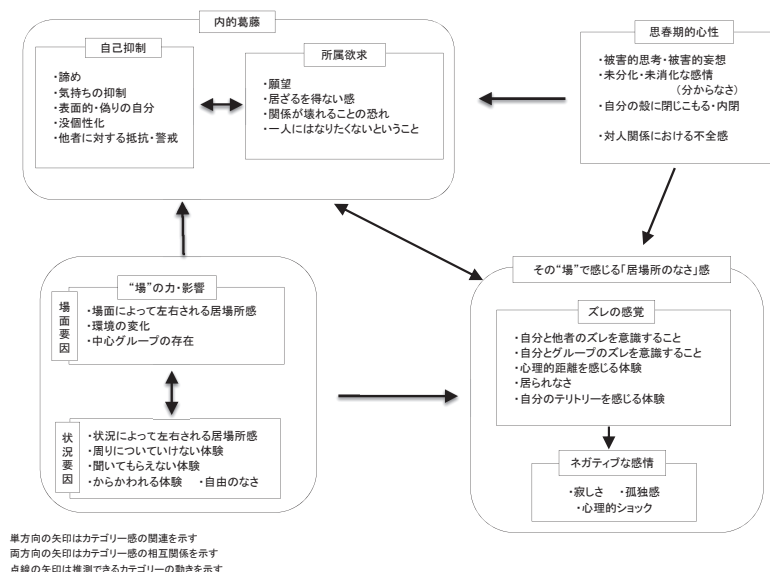


図1 中学生が語る「居場所のなさ」におけるカテゴリー関連図

りの中心になっていることや、「グループ」や「他者」が、特に学校集団の「中心的存在のグループ」を指している場合が多いという点が特徴である。この他に、『中心的存在の集団とはかなり離れてるんです [A]』等、他者との間に〈心理的距離を感じる体験〉や、『自分の居れる範囲が狭い分…何か空気が重いっていうか [C]』といった「居場所のなさ」を自分の範囲として捉えた《自分のテリトリーを感じる体験》も自分対他の「ズレ」として捉えられ、それによってその“場”に〈居られなさ〉を感じ、「居場所のなさ」の感覚が生じると想定される。

《ネガティブな感情》の内容には、〈寂しさ〉〈孤独感〉〈心理的ショック〉が含まれる。これらは《ズレの感覚》を感じることににより喚起され、「居場所のなさ」の感覚が意識されると予測される。

1-2 “場”の力・影響

「居場所のなさ」に影響するものとして【“場”の力・影響】が見出された。これは《場面要因》と《状況要因》の2つのカテゴリーから構成される（図1）。

《場面要因》の内容は、『誰も居ない [C]』『教室にいない [B]』等、何処にいるか誰と居るかといった〈場面によって左右される居場所感〉がある。また、小学校から中学校へ上がり、一つの節目を迎えるといった〈環境の変化〉によって自分が居る「場」を構成するメンバーが変わることが伺える。特に学校場面において『明るくて、あと、はっきり何でも言えたり。いろんな人と仲がいい…みたいな [B]』人で構成される〈中心グループの存在〉は、中学生にとって大きな影響があることが伺われた。このように《場面要因》は、物理的な場所や人（場のメンバー）等の具体的な場面が挙げられる。

《状況要因》の内容は、〈状況によって左右される居場所感〉の『家で居る時は、うるさい声

もしなくて…学校に居る時はもう、うるさかったり [A]』というような、「居場所がない」と感じている「場」に対して、より具体的な状況が強調される。特徴としては、〈周りについていけない体験〉〈聞いてもらえない体験〉など、同じ「場」に居るメンバー間でのやり取りや、意志を妨げられる状況がみられた。さらに中学生は〈からかわれる体験〉〈自由のなさ〉といったより現実的な体験までも含まれることが見受けられた。

《場面要因》と《状況要因》は『家では、親が話しかけても、あんま返してくれんっていうか。殆ど話を聞いてるって感じがしなくて [C]』と語られるように、各要因が単独で【“場”の力・影響】を形成するのではなく、相互的に作られるものであることが予測される。「場」の持つ力は、「今・ここ」の感覚に影響し、【その“場”で感じる「居場所のなさ」感】に作用するだけでなく、【内的葛藤】への関連も考えられる。

1-3 内的葛藤

【内的葛藤】は《自己抑制》と《所属欲求》の2つのカテゴリーから構成される（図1）。《自己抑制》と《所属欲求》は、お互いに関係しあって生じていることが見出された（図2）。

《自己抑制》の内容は、『普通にまあこんな感じの生活で十分かなあ～

[A]』といった〈諦め〉の感情や、〈気持ちの抑圧〉、『友達っているんですけ

ど、信用が殆ど出来ないんですよ [A]』といった〈他者に対する抵抗・警戒〉によって、「自分を出さないことによる守り」が見出された。対人面においては、「自分を出さないことによる守り」によって『普通に仲良くして…でもそんな深く…そんな信じんようにしてます [B]』といった〈表面的・偽りの自己〉として表れることが考えられる。さらに『（中心の人は）殆どの人間と通じてるんで。一回変なことしたり、変なこと言ったら、周りから変な眼で見られて完全に孤独になってしまう…っていうのは避けようってことで頑張ってるんです [A]』と語られる様に、目立たないようにする等の〈没個性化〉が見出され、ここでも〈中心グループの存在〉が中学生にとって、学校生活に適應するためには大きな影響力を持っていると推測された。

《所属欲求》の内容は、グループに所属したいという〈願望〉が含まれる。これは同時に『まあ、友達とは話せるけど、結局仲悪くなくても困るし [A]』といった〈関係が壊れることの恐れ〉〈一人になりたくないという事〉につながり、『ここにはいれないっていう気持ちなんですけど。（中略）考えた結果、まあ、ここにはおることにはなるんです。結局。居ざるを得ないみたいな感じ [A]』と語られるように、「居場所がない」と感じながらも所属していなければなら

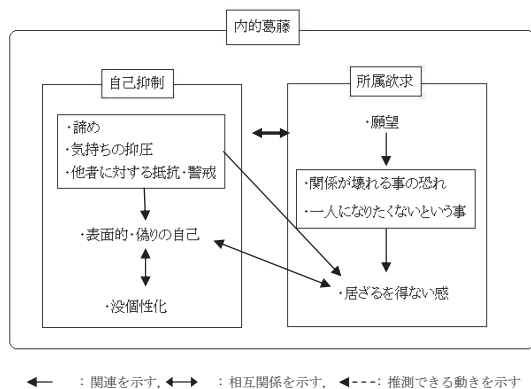


図2 中学生が語る《自己抑制》と《所属欲求》の相互関係

いという〈居ざるを得ない感〉を喚起させると考えられる。B、Cからも同様の語りが見受けられた。また、〈居ざるを得ない感〉は〈願望〉の希求から生じるだけでなく《所属欲求》と《自己抑制》を相互的に行き来することによって生じた〈諦め〉や〈気持ちの抑圧〉〈他者に対する抵抗・警戒〉の要素も働いていることが見受けられた。さらに、【その“場”で感じる「居場所のなさ」感】を感じることに、〈所属欲求〉や〈自己抑制〉が作用し、そのような動きの中で【内的葛藤】が生じると考えられる一方、【内的葛藤】を抱えるがゆえに【その“場”で感じる「居場所のなさ」感】といった感覚が生まれるという相互関係が推測される。

1-4 思春期的心性

【思春期的心性】の内容は、《被害者の思考・被害者の妄想》《未分化・未消化な感情（分からなさ）》《自分の殻に閉じこもる・内閉》《対人関係における不全感》の4つのカテゴリーから構成される（図1）。

《被害的思考・被害的妄想》の内容は、『勝手に思い込んでしまって。そう…考えてるんじゃないかなって [B]』のように、ある物事に対して被害的に考えたり捉えたりするような傾向を示す。《未分化・未消化な感情（分からなさ）》の内容は、筆者が研究協力者に対して“どのような気持ちだったか”“どんな感じがしたか”等、気持ちに触れるような質問をした場合に『ちょっと…分からん（小声）[C]』と度々語られ、うまく気持ちを捉えられない・表現できないといった、気持ちが未分化な状態を示していることが見受けられた。《自分の殻に閉じこもる・内閉》の内容は、『もう…一人でも何とも思わなくなってきた。最近は皆でおるより、一人でおる方が楽だなーと [C]』と心理的に他者から離れる状態を示す。《対人関係における不全感》とは、『友人関係はちょっと…内気な方だと思うんですけど [A]』のように、特に学校場面での対人関係のうまくいかなさを示す。以上これらは、いずれも思春期的な特徴として一つにまとめることができる。このような精神発達上の課題は、【その“場”で感じる「居場所のなさ」感】、【内的葛藤】それぞれに影響し作用していることが示唆された。

2. 大学生が語る「中学生の『居場所のなさ』」

4名の大学生（大学院生）が語る「中学生の頃の『居場所のなさ』」についての分析の結果、【その“場”で感じる「居場所のなさ」感】【慢性的に感じる「居場所のなさ」感】【“場”の力・影響】【内的葛藤】【思春期的心性】【「居場所のなさ」の消失】という6つの大カテゴリーが導き出された。なお、カテゴリー数は17、サブカテゴリーは数は36である（図3）。大学生の語りのデータを分析するとともに、中学生の語りのデータ分析結果と比較しながら検討する。

2-1 その“場”で感じる「居場所のなさ」感

「居場所のなさ」の感覚に関して【その“場”で感じる「居場所のなさ」感】という項目が見出された。これは《ズレの感覚》と《ネガティブな感情》の2つのカテゴリーから構成され

中学生の「居場所のなさ」に関する研究（清水 寛子）

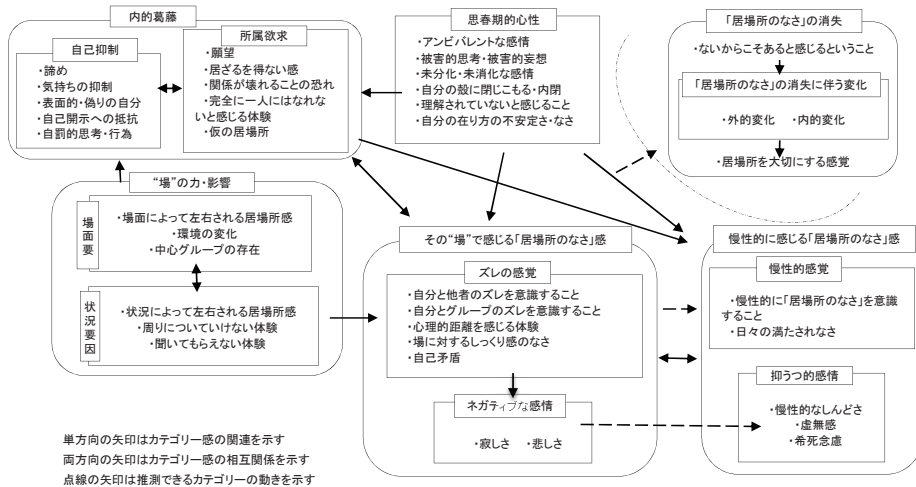


図3 大学生が語る「中学生の頃の『居場所のなさ』」におけるカテゴリー関連図

る（図3）。

《ズレの感覚》の内容の〈自分と他者のズレを意識すること〉とは、『ここに居ながらにして、でもまあ居なくなっても… [d]』等、同じ空間内に居て“場”を形成している他者に対して感じるズレの意識である。これは、大学生と違い中学生は、必ずしも他者と“場”を共有していなくても起こり得るという点で異なる。また、〈自分とグループのズレを意識すること〉は、中学生同様、同じ空間内に居るが、そこに形成された「グループ」に自分が属しておらず、その「グループ」に対して感じるズレの意識である。〈自分と他者のズレを意識すること〉と〈自分とグループのズレを意識すること〉にはっきりした対象があることが大学生共に両者に見られる。一方、中学生には見られなかった『ここで良いのかなあ？って感じ [f]』等、はっきりとした対象はなく、空間や感覚に対して〈場に対するしっくり感のなさ〉という感覚も見出された。上記3つが自分というものがしっかり存在していたのに対し、〈“ふっと”感〉は、『ふって思った時に…（居場所がないと感じる）（中略）皆と話してるのに、急にふっと我に返ってあれってなる [D]』等、自分を見失った瞬間に他とのズレを感じるものであると考えられる。また、「居場所のなさ」の感覚は〈心理的距離を感じる体験〉となって同じ空間に居ながらも心理的には切り離されていると体験される。そして、その「場」に対して〈いられなさ〉を感じることによって「居場所のなさ」が意識されることが推測される。さらに、《ズレの感覚》には『居場所感がない、ない、と思いながらも…やっぱりいる（笑） [d]』と語られるように、〈自己矛盾〉を感じながらもそれを受け入れる自分が存在していることが見てとれた。

《ネガティブな感情》の内容は、〈寂しさ〉〈悲しさ〉〈恐れ〉〈不安〉〈孤独感〉があり、《ズレの感覚》を感じることによって喚起されることが考えられる。つまり、《ズレの感覚》が《ネガティブな感情》を引き起こし、それらが組み合わさることで「居場所のなさ」感が意識されることが示唆された。一方、感情面の表出カテゴリーは大学生に比べ中学生は少ないことが特徴とし

て挙げられる。

2-2 慢性的に感じる「居場所のなさ」感

「居場所がない」と感じる感覚には、【その“場”で感じる「居場所のなさ」感】の他に、中学生の語りからは見られなかった【慢性的に感じる「居場所のなさ」感】が見出された。これは《慢性的感覚》と《抑うつ感情》の2つのカテゴリーから構成される(図3)。

《慢性的感覚》の内容は、『(居場所のなさ)をわーっといつも感じてたなって感じがします[C]』の様に、いつどこにいても「居場所のなさ」の感覚が付きまといっているというような〈慢性的に「居場所のなさ」を意識すること〉と、日常が充実していないといった〈日々の満たされなさ〉から成る。つまり、これは何らかのきっかけや特別な感覚などによって引き起こされるのではなく、常に個人の中に存在する「居場所のなさ」の感覚であると考えられる。

《抑うつ感情》の内容は〈慢性的なしんどさ〉〈虚無感〉〈希死念慮〉が含まれる。これは、『抑うつ的な…感じが…[f]』『あーなんかもうめっちゃ死にたいって思っていました[g]』と語られるように、【慢性的に感じる「居場所のなさ」感】と【その“場”で感じる「居場所のなさ」感】では同じ「居場所のなさ」の感覚でも、その質や要素が違うことが示唆される。また、《抑うつ感情》は【その“場”で感じる「居場所のなさ」感】で生じる《ネガティブな感情》から変化し得るものであると考えられる。また、【その“場”で感じる「居場所のなさ」感】を繰り返し経験することで【慢性的に感じる「居場所のなさ」感】へ変化する可能性も予測される。そのような変化の可能性も含めて、【慢性的に感じる「居場所のなさ」感】は【その“場”で感じる「居場所のなさ」感】と相互に関係しあっていると考えられる。

2-3 “場”の力・影響

【“場”の力・影響】は、《場面要因》と《状況要因》の2つのカテゴリーから構成される(図3)。

《場面要因》の内容は、『凄く自分がこう…すっここここに居ずに、何かずれて居てる感じっていうのは学校場面が一番強くて…。家の中では…その感じっていうのは…ほとんどなくて…家は家で…自分の居場所はしっかりある感じっていうのはあったかな[d]』等と語られる〈場面によって左右される居場所感〉の他、〈環境の変化〉、〈中心グループの存在〉は中学生同様大学生にも見られた。

《状況要因》の内容は、中学生同様、「場」がどのような状況であることを示す〈状況によって左右される居場所感〉や〈周りについていけない体験〉、〈聞いてもらえない体験〉といった自分の意思が阻害される様な体験が含まれる。また、《場面要因》と《状況要因》との相互関係、【“場”の力・影響】と【その“場”で感じる「居場所のなさ」感】、【内的葛藤】の関連においては、大学生と同様の結果が得られた。

2-4 内的葛藤

【内的葛藤】は《自己抑制》と《所属欲求》の2つのカテゴリーから構成される(図3)。こ

の《自己抑制》と《所属欲求》は、お互いに関係しあって生じていることが見出された（図4）。

《自己抑制》の内容は、「居場所がない」という事実や、その要因に対して『最初からこう、ある程度割り切ってたものがあつたかな[d]』といった〈諦め〉の他、〈気持ちの抑圧〉や『（感情を）出したくなかつたし、出さなかつた[e]』等大学生の語りのみにみられ

た〈自己開示の抵抗〉によって、「居場所のなさ」から「自分を出さないことによる守り」があることが見出された。さらにその守り是对人面において、中学生と同様〈表面的・偽りの自分〉として表れることが予測された。そして、大学生のみに見られた〈自罰的思考・行為〉では、「自分を責めたり傷つけることによる守り」があることが見出された。これは、〈気持ちの抑圧〉により〈表面的・偽りの自分〉に終始するあまり、抱えきれなくなったものを〈自罰的思考・行為〉に向けることが予想される。一方で、〈他者に対する抵抗・警戒〉〈没個性化〉が大学生の語りからは見られなかつたのは、大学生の視点が客観的に置かれているのに対し、中学生の語りには、自分を中心とした主観的な語りである為であると推測され、現在中学生である生徒の、より現実的な現状が伺えた。

《所属欲求》の内容は、グループに所属したいという中学生とは違い、「居場所」が欲しいという〈願望〉や、「居場所がない」状況にいる自分を分かってほしいという〈願望〉が見出された。『（今の関り方について）そう変えたいとは思わないですけど…[e]』といった〈関係が壊れる事の恐れ〉や『完全に誰とも付き合わないで過ごしてたらいいかっていうと…やっぱり自分はそうはいかなかつた[d]』と語られるような〈完全に一人にはなれないと感じる体験〉は〈願望〉があるからこそ生じてくる感覚であると推測された。また、〈居ざるを得ない感〉を感じながら、結果として〈仮の居場所〉を作ることによって《所属欲求》を処理しようという動きが見られる。「完全に一人にはなれない」と、体験を対象化して語る大学生に対し、「一人になりたくない」と語り、体験が対象化されにくい中学生の間で多少の違いが見られたが、《自己抑制》と《所属欲求》間、【内的葛藤】と【その“場”で感じる「居場所のなさ」感】との相互関係は中学生と同様の結果が得られた。また、そのようなやり取りを繰り返すなかで【慢性的に感じる「居場所のなさ」感】が生じ、「居場所のなさ」の感覚の「慢性化」につながると考えられる。

2-5 思春期的心性

【思春期的心性】は《アンビバレントな感情》《被害的思考・被害的妄想》《未分化・未消化

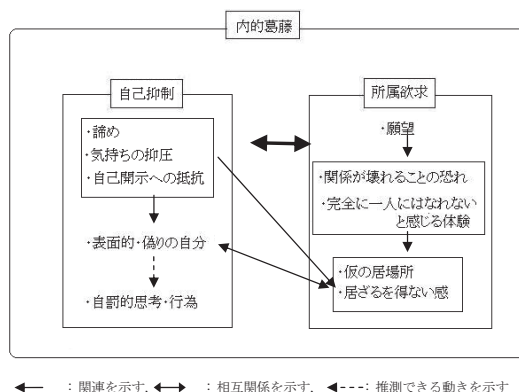


図4 大学生が語る〈自己抑制〉と〈所属欲求〉の相互関係

← : 関連を示す, ↔ : 相互関係を示す, - - - : 推測できる動きを示す

な感情》《自分の殻に閉じこもる・内閉》《理解されていないと感じる事》《自分のあり方の不安定さ・なさ》の6つのカテゴリーから構成される (図3)。

《アンビバレントな感情》の内容は、『誰からも見放されるのは嫌だけど…でも過保護にしてほしくないし [g]』といった両価的感情からなる。《被害的思考・被害的妄想》の内容は、ある物事に対して、被害的に考えたり捉えたりするような傾向を示す。《未分化・未消化な感情》の内容は、うまく気持ちを捉えられない、表現できないといった、気持ちが未分化な状態や気持ちの処理の困難さを示す。《自分の殻に閉じこもる・内閉》の内容は、『一人で閉じこもって [e]』『居場所がないというより…居場所を持ちたくない [f]』のように、心理的に他者から切り離された状態を示す。これは、大学生のほうが中学生よりも他者との関係性が切り離されている、若しくは断絶に近い状態が示された。《理解されていないと感じる事》の内容は、周りから理解されていないと感じる状態を示す。これは、《被害的思考・被害的妄想》や《自分の殻に閉じこもる・内閉》とも関連していると考えられる。《自分のあり方の不安定さ・なさ》の内容は、『自分…のなさ…ともつながるというか [f]』のように、自分という存在が揺さぶられるような感覚や、「自分のなさ」の感覚を示す。中学生には、大学生で見られた《アンビバレントな感情》《理解されていないと感じること》《自分の在り方の不安定さ・なさ》は見出されなかった。【思春期的心性】が【慢性的に感じる「居場所のなさ」感】と関係している事を除いては、【内的葛藤】【その“場”で感じる「居場所のなさ」感】との相互関係は中学生と同様の結果を示した。

2-6 「居場所のなさ」の消失

【「居場所のなさ」の消失】は《「居場所のなさ」に伴う変化》《居場所を大切にする感覚》《ないからこそあると感じるということ》の3つのカテゴリーから構成される (図3)。

《「居場所のなさ」に伴う変化》の内容は、『自分の中でこうびたとはまるものがあったかな [d]』といった、「居場所がある」感じを《感覚的変化》として捉え、『感覚として感じるのは家族が凄い支えてくれたから [e]』『分かってくれる友達がいるっていうのは全然違う [g]』といった、周りの環境や他者との間に生じる関係性の《外的変化》、『被害者意識がなくなったこと [e]』等の《内的変化》という3つの変化が生じていることが見出された。

《ないからこそあると感じるということ》の内容は、『分からなかったものが、こう…ぴったりはまった時、あーやっぱりこの感じ。っていうのが、人と関わってみたりしながらで自分がずっとこう…こういうのを求めてたから、ある程度は人と付き合ってきたんやあっていうものははっきりと分かる感じ [d]』と語られるように「居場所がない」と感じていた体験やそれを取り巻く様々な問題を通して、「居場所」を得た感覚を感じることを示す。また、《ないからこそあると感じるということ》の体験が《「居場所のなさ」に伴う変化》への気づきに繋がると考えられる。また、これらの変化を経て最終的に《居場所を大切にする感覚》が芽生えることが推測される。また、語られる内容からみると、「居場所のなさ」の消失については、何

らかのきっかけや出来事があって変化が意識されるものではなく、今思えばいつのまにかあったという様な無意識的に変化するものであると考えられた。

総合考察

1. 中学生の「居場所のなさ」

1-1 「居場所のなさ」の感覚

本研究では、現在「居場所がない」と感じている中学生と、中学生の頃に「居場所がない」と感じていた大学生の語りから、「居場所のなさ」とは一体何か、その規定因及び影響について探索的に検討した。その結果、中学生では、大学生同様、【“場”の力・影響】、【内的葛藤】や【思春期的心性】が【その“場”で感じる「居場所のなさ」感】に影響していることやその相互関係が推測された。一方、大学生では、【“場”の力・影響】、【内的葛藤】や【思春期的心性】といった要因が【その“場”で感じる「居場所のなさ」感】に影響していることやその相互関係、また、それらが繰り返されることによって【慢性的に感じる「居場所のなさ」感】が生じる可能性について見出された。また、その後、様々な変容を経て【「居場所のなさ」の消失】に至るという結果が導き出された。

ところで、本研究において「居場所のなさ」の感覚に、【その“場”で感じる「居場所のなさ」感】と【慢性的に感じる「居場所のなさ」感】といった質の違う2つの要素が見出されたことは注目すべき点である。前者が外的要因（場）と内的要因が絡み合って生じる感覚とすれば、後者は内的要因によって生じる感覚であると考えられる。現在「居る場」において「居場所がない」と感じる場合、「今・ここ」の感覚を基盤として生じる。さらに、その「場」を作り上げる他者の存在が必須条件になり、この「場」での感覚は「自分対他者」の関係性の中から生み出されるものであることが考えられる。一方、慢性的に「居場所がない」と感じる場合は、必ずしも「場」の要素や「他者」の存在は必要とせず、「自分対自分」の関係性の中から生じてくるものであると推測される。本来、「居場所感覚」とは物理的な場所と心理的な場所が複雑に絡み合って生じると言われてきたが、「居場所のなさ」の感覚は、「場」や「他者」を越えて、より多層な意味を持ち個人的なレベルで存在することが示唆された。

1-2 「場」と「居場所のなさ」との関係

前項で外的要因として述べたように、「居場所のなさ」を感じる一つの要因として【“場”の力・影響】が見出された。ここでいう「場」とは、Sullivan (1940)³⁾の「対人的場 (interpersonal situation)」と考える。

これまで、どんな場所や場面が「居場所」となるのかといった研究が多くなされ、そこで多く選択された「場所」や「人」が、さも「居場所」の決定因であるかのように言われてきたきらいがある。本研究においても、「ここには『居場所』があり、ここには『居場所』がない」

といった物理的な「場所」やその場を構成するメンバーを意味する《場面要因》が見出されたが、これ自体が直接、「居場所のなさ」を起因するものではないと考えるべきではないだろうか。むしろ、《場面要因》と《状況要因》が複雑に絡み合って作られる「場」に自分が「居る」という事実が、「居場所のなさ」の感覚に影響をもたらす背景となっていることが考えられる。特に中学生で顕著であったのが、『周りの子はみんなグループだけど、この人だけ一人 [B]』の様なグループに属していないという語りである。河合 (1976) が「わが国においては、場に属するか否かがすべてについて決定的な要因となるのである」と指摘しているように、「場」(グループ) に自分が属しているかどうか、「居場所のなさ」の感覚への大きな要因となっていることが伺える。また、『皆でおったら席外せんかなあって。そういう風に席外したら、何か言われそうで、その分自分が居れる範囲…居る範囲が狭くなる感じ [C]』と語られ、その「場」から自分が排除されることは、死活問題であると考えられる。土居 (1985) が「日本人にとっては自分がどの集団に属しているかが常に重要であり、いったん一つの集団に所属するとなかなかそこから抜け出す事ができない」と述べているように、「場」と自分がどのような関りをもって存在しているのかは重要であることが考えられる。さらに河合 (1976) は、母性原理に基づく「場の倫理⁴⁾」と父性原理に基づく「個の倫理」に触れ、「場のなかにおいては、すべての区別があいまいにされ、すべて一様の灰色になるのであるが、場の内と外とは白と黒のはっきりとした対立を示す」と論じている。つまり、「場」の内と外の対立は、「場」に属しているかどうかの状態を指すものと考えられる。しかし、中に「居る」ということは、「場の倫理」に支配され、「場」から排除されないように平衡状態を保とうとする力を受ける。つまりこれらは〈完全にひとりになれないとを感じる体験〉〈一人になりたくない事〉と感ずることであり、だからこそ「居場所がない」と感ずているにも関わらず、〈居ざるを得ない感〉を抱き、〈仮の居場所〉を作ってまでその「場」に居続けなければならないのである。このような「場」に対する自分との関係性や在り方によって「居場所のなさ」としての《ズレの感覚》がより明確化されるのではないかと考えられる。

1-3 思春期的心性と「居場所のなさ」との関係

(1) 自他の区別 (自我の芽生え)

「居場所のなさ」における《ズレの感覚》には、【思春期的心性】もまた一つの要素として影響していることが考えられる。思春期は、急激な身体的変化とあいまって精神的にもきわめて大きな変革を来す時期であり、この時期の子どもは「自他の区別」の混乱の再出現期とされている。また、森 (1978) が「自他の区別」について、母子関係における「自他」の確認とは異なる、より激しい衝動に根ざす内的葛藤の投影化現象であると論じているように、本研究においても、「居場所のなさ」の感覚として《ズレの意識》が見出され、その周辺要因として【思春期的心性】と【内的葛藤】が導き出された。「居場所のなさ」の感覚は、こういった自我の発達の要素によって生じる可能性があると予測される。つまり、「居場所がない」と感ずるこ

とは、「自分」と「他」を意識するという心の働きによって明確になり、その際に生じてくる【内的葛藤】との相互作用や他の【思春期的心性】によって強められていくのではないと思われる。さらに、「自分」と「他」を意識することによって、「自分対他者」の間のズレだけでなく、「自分対自分」の間のズレにも意識が向くようになる。その感覚も「居場所のなさ」を感じる一要因として考えられる。

（2）「自分」と「居場所」

北山（1993）や荻原（1997）によって「居場所」と「自分」の密接な関係について論じられてきたが、本研究における協力者の中には『自分の居場所のなさっていうのをやっぱり、自分の中心がないような…感じで考えてたので[f]』と語られるように、「居場所がない」と「自分がない」ことが関連していることが支持された。ここでいう「自分がない」感覚を、精神病患者や神経症患者においてみられる「離人感」とは区別した上で、「自分」と「居場所のなさ」の関係についてもう少し考察したい。

「自分がない」という感覚は、「自分」へ意識が向いている状態である。自我の再構成にあたり、「自他の区別」から「自分」に意識が向くといった心の流れから生じるものであると考えられる。しかし、「自分」は決して「自己」「自我」ではなく（北山，1993）、個人が集団の中にすっかり埋没している場合や、個人が集団の中にある自己を自覚していても、むしろ集団に所属していたいという願望が勝り自己を主張しない場合に、その個人は「自分がない」と見なされる（土居，1971）。このことから「自我が無いから『居場所』がない」ということではなく、「自己」や「自我」があっても「居場所がない」と感じる可能性があると考えられる。しかし、「自分がない」と感じる時には、「居場所がない」と語られることがある。つまりこれは、「自己」や「自我」といった単一的要素によって「居場所のなさ」が生じるのではなく、「自己」や「自我」よりもより包括的で周囲との関係性をも含む広がりをもつ「自分」という枠組みの中で、様々な要素と絡み合いながら生じるものの一つとして捉えられるのではないかと考えられる。

1.4 「ある」と「ない」ということ

【「居場所のなさ」の消失】は大学生のみに見出され、「居場所がない」という経験を経て過去のものとして捉えられるからこそ見出された語りである。また、語りからは、はっきりとしたきっかけや原因が語られることはなく、今思えばいつのまにかあったという様な無意識的に変化するものであると考えられる。今までないと感じていたからこそ、ぽっかり空いた穴が埋まる様に、その時になって初めて分かるというのである。「居場所がある」という感覚は、「居場所がない」と感じることによって意識されるものであり、「ない」という意識から「ある」という感覚の希求が生じ、それが満たされることによって初めて「居場所がある」という感覚が備わると考えられる。つまり、「居場所がある」時には「居場所」というものは意識されず、個人の中に埋没している状態といえる。もしその時に「居場所とは何か？」と問われたとして

も、「居場所があるとはこういうものです」と答えられるものではないのではないか。それは、「『居場所がない』と感じない感覚とは何か?」と問うているに等しいからである。

2. まとめと今後の課題

本研究において、先行研究で指摘されてきた様に、「居場所がない」ことが個人にとって危機的状况であることは否定できるものではなかった。しかし、「居場所がない」と感じることは様々な意味が複雑に絡み合い、ネガティブな面のみによって捉えられるものではないことが示唆された。つまり、「居場所がない」ことの裏には自己成長の芽が秘められており、個人がどのように「自分」と向き合い、付き合っていくかにより変わっていくものであると思われる。また、本研究によって「居場所がない」という感覚は、具体的な「場」によって規定されるのではなく、「居場所がない」と感じている「自分」を基盤としていることが示唆され、「居場所がない」人のために「居場所がある」かのような空間を他者が作り上げ、提供するのではなく、個人が「居場所がない」と感じている「自分」と向き合っていけるようなサポートが求められているのではないだろうか。この他、「居場所のなさ」の消失について、本研究では大学生の研究協力者全員が消失に至っていた。しかし、予備調査の段階では、現在も継続して「居場所のなさ」を感じていると答えた学生もいたことから、今後は、実践的研究に繋げる為にも、中学生という時期に絞って焦点をあてるのではなく、各発達段階においての研究が必要だと思われる。また、「居場所のなさ」がどのように生じ消失していくのかといった変容過程をさらに詳しく調査していく必要があると思われる。

〔注〕

- 1) アンケートはフェースシート、「居場所のなさ」を感じているかどうかについての質問、「居場所」についての自由記述、面接調査の協力意志、の4点で構成されている。
- 2) データ収集に際して、本稿では、語りから「居場所のなさ」を検討することに焦点を当てる為、一部割愛するが、実際は言語面接の前に「居場所のなさ」についての描画を実施し、その描画に関するインタビューを行っている。その後、「居場所のなさ」についての言語面接を実施し、そこで得られたデータを本研究では扱っている。
- 3) Sullivanは、二人以上関わり合ってつくる場を全て「対人的場 (interpersonal situation)」と呼んだ。
- 4) ここでいう河合の「場の倫理」とは、母性原理に基づく絶対的平等観、すべて包み込む・呑み込むという特徴を持つ。

〔引用文献〕

- 土居健郎 (1971). 「甘え」の構造 弘文堂.
 土居健郎 (1985). 表と裏 弘文堂.
 石本雄真 (2009). 居場所概念の普及およびその研究と課題 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究

- 紀要, 3 (1), 93-100.
- 河合隼雄 (1976). 母性社会日本の病理 中央公論社.
- 川島加菜 (2010). 描画にあらわれる『こころの居場所』感——青年期・成人期初期を対象として 臨床心理学研究, 8, 93-109.
- 北山 修 (1993). 自分と居場所 北山修著作集日本語臨床の深層第3巻 岩崎学術出版社.
- 正崎祐史 (2007). 青年期の「居場所」に関する研究——「居場所がない」感覚と対処行動との関係から 追手門学院大学心理学部紀要, 2, 84.
- 森 省二 (1978). 思春期と境界例 中井久夫・山中康裕 (編) 思春期の精神病理と治療 岩崎学術出版社 pp189-221.
- 中島喜代子・廣出 円・小長井明美 (2007). 「居場所」概念の検討 三重大学教育学部研究紀要, 58, 77-97.
- 中村泰子 (1999). 「居場所がある」と「居場所がない」との比較——○△□法の基礎的研究として 児童・家族相談所紀要, 16, 13-22.
- 則定百合子 (2006a). 思春期における「こころの居場所」に関する研究 神戸大学発達科学部研究紀要, 13 (2), 17-27.
- 則定百合子 (2006b). 思春期の心理的居場所感と抑うつ傾向との関連 神戸大学発達科学部研究紀要, 14 (1), 9-13.
- 小川幸男 (2007). 居場所作り 村山正治 (編) 学校臨床のヒント——SCのための73のキーワード 金剛出版 pp147-149.
- 萩原建次郎 (1997). 若者にとっての「居場所」の意味 日本社会教育学会紀要, 33 (2), 33-44.
- 杉本希映・庄司一子 (2006a). 「居場所」の心理的機能の構造とその発達の変化 教育心理学研究, 54 (3), 289-299.
- 杉本希映・庄司一子 (2006b). 中学生の「居場所環境」と学校適応との関連に関する研究, 学校心理学研究, 6 (1), 31-39.
- 住田正樹・南 博文 (編) (2003). 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 九州大学出版会.
- Sullivan, H.S (1940). CONCEPTIONS OF MODERN PSYCHIATRY. 中井久夫・山口 隆 (訳) (1976). 現代精神医学の概念 みすず書房.
- 竹森元彦 (1999). 心の発達における居場所の役割 鳴門教育大学研究紀要, 教育科学 (編) 14, 127-136.
- 堤 雅雄 (2002). 「居場所」感覚と青年期の同一性の混乱 島根大学教育学部紀要 (人文・社会科学), 36, 1-7.

〔付記〕

本文執筆にあたり、懇切丁寧なご指導を賜りました東山弘子教授に深く感謝申し上げます。また、ご多忙のところ適切なご指導を頂きました石原宏准教授、そして本研究にご協力いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

(しみず ひろこ 教育学研究科臨床心理学専攻修士課程修了)

(指導教員：東山 弘子 教授)

2011 年 9 月 27 日受理